

●道向かふに兔小屋見ゆ疫病の始まりの日々を癒しくれにし

梅津純子

この一連で語られる事柄、その始まりの日々。それが疫病の始まりの日々ということなので、コロナ禍のその始まりの頃としれる。道向かふに、も身近いところの道、か。兔小屋には兔。下句には括ったおもいがある。

タイトル「兔の居た小屋」の通り、一連のなかで兔は居なくなる。それがわかる歌、

久々に小屋を覗けばぎつしりと段ボール積む兔の香無く

ぎつしりと段ボール積む、の描写の丁寧さ。そんなことで読んでみると小さい頃に兔を飼っていたことに思いが及ぶ。鼻を押し付け（二首目）や、なにより青草の匂ひ（六首目）、からも。また、焚きつけ用に、杉っ葉を拾いに山林に入ったときに、野兔をみたことがあった。これは白ではない。この一連には、灰色の兔も登場する。

箱の陰に動きのありて灰色の兔身を出し此方窺ふ

すぎさって、なお記憶に残るものがあるのは、コロナ禍でも変わらない。

●新春の百人一首生涯で最後と切り畳をにらむ

大橋千佳子

畳をにらむ、には一種臨場感がある。家庭内のイベントとして往日一般的だったかもしれない百人一首。ここでは高三のその卒業まぢかにおこなわれた百人一首。そこで「生涯で最後と」（あえて）言い切ったものか。

君、子よ、君の、あなたには、子、とあるのが、みなクラスの子たち、か。歌は、それらの子の卒業まぢかとなったそれぞれの場面である。「卒業に着るスーツ縫う教室」（六首目）というところには驚きもある。スーツを縫うんだ。

卒業に着るスーツ縫う教室はカウントダウンの加速度を増す

三年を大橋先生のもとで学んだということだろうか。子との距離感、その親しさには今を感じる。歌のびやかで生き生きとしている。

あなたには筆の進まぬこともある大げさもある答辞というもの

●見に行つてやはり子猫をもらひきぬ梅ヶ丘より 十一月 雨

布宮慈子

やはり、にくらかそれまでの気持ちの交換のようなものがかがわれる。つまりやりとり。娘の歌でもある。梅ヶ丘より、としていて、そうは説明されていないが。「十一月 雨」も含めて、そこには、そのころの空気感がある。場面がそれぞれに訴えてくる。

リス（の喪失）から子猫、それもサバトラ模様のもの。うち、リスの関係するエピソードがこれ。眠るごと動かぬリスを手に載せて娘は学校に行かないと言ふ。そうしてこれが一連（サバトラ模様）のさいごの歌。猫の生の終わりが、娘の人生の一区切りになったころでもあることが語られる。切なさがある。そのことでも残っている。娘と共に暮らす人の現れしころ猫は十九年の生を閉ぢたり

前号作品短評B 〈慈子〉

●一つ家をえしことのみとおもわねどウエルカム下がる家前に出る
小野澤繁雄
わりに新しい家のドアに「Welcome」と札が下がっているのはよく見られる光景だ。家を建てることは人生の中で重大なこと。人の生き方まで見えてくることがある。散歩の途中だったのだろうか、作者はそのドアプレートに出会う。そこでふと考える。誰に対してウエルカムなのだろうか？友人、知人など特定の人に対してではなく、近隣の人に対してウチはフレンドリーなんですよ、と表しているのだろう。

●整然とならんでそれが小花類冬の花壇は（しあわせ）名乗る
冬の庭に並べられた小花は、パンジーの類かもしれない。いかにも幸せをアピールしているように見える。今風な家を眺めて感じたことを述べているが、住宅展示場にある家をモデルとして諷刺画的に表現したと言えないこともない。

●去年今年さ庭飾りし千両の朱の実活けぬ正月花に
河村郁子
題「庭めぐり」のトップに置かれた歌。「去年今年」は、新年を迎えての行く年来る年を感慨を

込めていう語。「さ庭」は、齋み清めた場所のことだが、「狭庭」と掛けているのかもしれない。千両の赤い実を正月の花として活けたというめでたい歌である。

たがふなく立春に開く一輪が律儀に在りし長姉のごとし

真夜の雪枝に残して朝かげに紅と白との色ひびき合ふ

直前の歌を受けて、紅梅を詠う。時季を間違えることなく咲く一輪の花は律儀に生きた一番上の姉のようである。真夜の雪の歌は正月らしい美しさだが、色が響き合うと表現したことに注目したい。

●はてしなき苦難の痕よ蝶の舌

新野祐子

「ディアスポラ紀行」を読む、と題する一連はなかなか難解である。その副題は「追放された者のまなざし」。「ディアスポラ」は古代ギリシャ語で「離散」を意味するそう。もともとはパレスチナ以外の地に住むユダヤ人、またその社会をいい、転じて、原住地を離れた移住者のこと。著者の徐京植ソンキョンシクは在日朝鮮人二世であり、朝鮮半島を離れたコリアンもディアスポラであろうと、その境遇などを記す。作者が短信で触れているとおり、十年ほど前にこの本を買ったが初めのほうで挫折したのだという。改めて読んでみて、句になった。「蝶の舌」については、「蝶の舌ゼンマイに似る暑さかな」という芥川龍之介の句がある。

烈士の墓草蓬蓬と光州は

いのち削り刻みし活字草の花

一九八〇年五月に起きた光州事件は、大韓民国の全羅南道の道庁所在地だった光州市を中心に起きた市民による軍事政権に対する民主化要求の蜂起であり、官民あわせての死者は二千人を超えたとの説もある。当方は映画「タクシー運転手 約束は海を越えて」(二〇一七年)で知るのみだが、すさまじい闘争だったことは想像できる。「草の花」の句は、徐京植の人生を物語っているのだろう。

●スイートピー、黄のカーネーションとりどりに活けて明るむわが早春賦

市川茂子

黄色のカーネーションとは珍しい。黄色は金運・幸福の象徴とされており、贈り物に喜ばれているそう。早春賦は、春の初めに作られた詩(歌)という意味で、唱歌としては「春は名のみ風の寒さや」という由紀さおり・安田祥子姉妹による歌声でよく知られている。花の名前のカタカナと古風な早春賦とがうまくマッチして、作者の人生を感じさせる一首である。

あまおうに砂糖をふれば切り口ゆ出でくる汁は赤き血の色

珍しくどきりとする歌。世界情勢のことを後の二首でも述べているから、現在の不安を素直に表現したといえる。「ゆ」は、起点を示す「から」の意味。なお、「あまおう」はイチゴだが、品種名ではなく商標名らしい。